

不戦兵士・市民の会 理事

故 中島 五郎さんを偲ぶ

不戦兵士・市民の会 事務局長

森脇 靖彦



だつた。

来年一月に会が創立三十周年を迎えるイベントの一つとして、長く途絶えていたアメリカの退役軍人がつくる反戦・平和団体「ベテランズ・フォード・ピース」(VFP)との交流が、今秋にも実現する運びで、数少なくなった日本の元兵士との交流が目玉となるので、「中島さん、その時は車を用意しますから頼みますね」と念を押したら、「良かつたね」と返事されていた。

携帯に電話してもいいと聞いたので、それから時々電話したが通じなかつた。六月二一日に電話すると娘さんがでられて、また具合が悪いとのこと。その後、奥さんから危篤とのお知らせがあり、翌日亡くなつてしまわれた。余りにも突然の逝去だつた。

六月三〇日に地元の群馬県高崎市で営まれた葬儀に参列した。喪主は長男の昭さん。大きなホールに二〇〇人ほどが列席され、数人の弔辞からは地元に密着した人柄や、戦場体験をふまえた平和を希求する姿が浮き彫りにされた。「語り部」活動を生きがいに、不戦兵士・市民の会の活動に献身する姿が、それぞれから紹介されたことは印象深く、率直にうれしかつた。

* * *

「不戦兵士・市民の会」理事の中島五郎さんが六月二六日、逝去された。九二歳でした。
「腸閉塞で三月に入院した。回復し一時は自宅に戻つたが肺炎で再入院。二ヶ月近い入院で参つたよ」
六月一日に病院から携帯電話をかけてこられた中島さんは、少し弱気な面もあつたが、しつかりした口調

中島五郎さんは、三年前の二〇一四年四月、九一歳で亡くなつた菊地定則さん(群馬支部代表)を継いで活動

されていたのですが（中島さんの菊地さんへの弔文は、「不戦」¹⁷⁰号二〇一四年夏季号に掲載されている）、その菊地定則さんの納骨法要（二〇一四年五月三一日・渋川市「玉泉院」）に本條勤監事、太田直子理事と一緒に参加した折り、中島さんが自家用車を用意してくれることになった。前日は奥さんから電話があり、「もう歳なので、皆さんに乗せての運転は止めるよう言っているのですが、きかないのです」とのこと。「それならば私が運転しますから」と奥さんに伝えて、高崎駅で待ち合わせたときのこと、中島さんが「ベンツ」から颯爽と現れたのでした。突然の外車の運転をビビッている私に、「森脇さん、途中で代って下さい」と走り始めたのですが、どうとうその日は半日余、中島さんの運転にお世話になりました。中島さんは終始、愛車の運転を楽しままれていて、穏やかな笑顔とともに思いだします。

* * *

中島さんは一九二五（大正十四）年六月、群馬県高崎市に生まれ、一九三八（昭和十三）年、高崎商業に入学。すでに日中戦争は中国全土に拡大しており、陸軍幼年学校をめざしたが視力検査で不合格。猛勉強の末、一九四三年九月、埼玉県朝霞の陸軍士官学校に入学したが、肺結核で退学。

その後一九四四（昭和十九）年、繰り上げ徵兵検査で

甲種合格となり、一九四五（昭和二十）年三月、高崎の東部第38部隊に現役兵として入隊、同年四月、北支派遣軍独立歩兵第63大隊編入（山東省諸城県諸城市）。一九四五年七月、甲種幹部候補生教育隊入隊（山東省青島市）。八月一五日、日本の敗戦を知るも、命令は歩兵第六三大隊復帰で鉄道警備。同年一二月、八路軍との激戦で負傷、捕えられた。八路軍の野戰病院で手術を受け、療養中に劉少奇の『社会發展史』を読み、初めて知る世界の歴史に圧倒されたそうだ。

一九四六年一〇月復員、農業に従事後、自動車整備業などを行う陽光自動車有限会社を起ち上げ、代表取締役、取締役会長を経て二〇〇六年退職。最初の所でふれた自動車好きは、ここから来ているのだろう。

* * *

戦後七二年を経た今日、当会には戦場・戦争体験の「語り部」の依頼やマスコミの取材が数多く寄せられるが、お願いできる方が次々に亡くなられたり、病床に伏すなか、中島さんは数少ない体験者としてマスコミの取材に応じてもらつたり、老軀を自らはげまし、語り部活動を精力的におこなつた。地元の群馬県はもとより、山形県南陽市や大阪府河内長野市にまで足を運んでいただいた。また友誼四団体とともに一九八八年以來、毎年開催してきた「7・7盧溝橋事件記念集

会」の二〇一五年の記念集会では、当会を代表して中国大使館でスピーチをしていただいた。

「近年、戦時中の日本軍の加害行為に対する反省を、自虐史観だというとんでもない論調がまかり出て、しかも現政権、安倍首相の出現以来、この風潮がさらに強まっている状態になつております。この赦（ゆる）しがたい動向を放置してはいけないと決意を固めて、不戦兵士・市民の会の『語り部』活動に熱を入れるようになります。身体の動く限り、この戦時中の日本軍の行為を語り継いでいこうと思つております」と話され、程永華駐日大使と固い握手を交わされていた。

「戦場体験記・日本降伏後も続いた戦争／八路軍と激戦の後、捕えられて」は『不戦』171号（二〇一四年秋季号）に収録されている。また二〇一四～五年に行なった「語り部」活動、「盧溝橋事件78周年記念集会」での挨拶などを収録した「『関東軍』『支那派遣軍』の住民への残虐行為を風化させてはいけない（眞の日中友好のため）」が『不戦』174号（二〇一五年夏季号）に収録されている。

*

*

*

ご高齢とはいって、まだまだお付き合いさせていただけるものと思っていたら、中島五郎さんも安倍政権との対決を残したままでは、死にきれない思いであつたと推察します。ご遺志を継いでがんばりますので、お見守り下さい。どうぞ、ゆっくりお休みください。

元兵士たちが語りつぐ軍隊・戦争の真実

人を殺して死ねよとは

日本図書館協会選定図書

全国学校図書館協議会選定図書

戦友よ

生きているうちに語ろう
語らずに死ぬのは止めよう
語ってから死のう

監・著 不戦兵士・市民の会



四六判 240頁
発行（株）本の泉社
定価 1500円（税込）

季刊『不戦』誌は、1988年の創立以来、29年、179号を数えます。

そこに掲載された生き地獄絵図のような戦場・戦争体験記の一部をまとめました。戦場体験を語り継ぐこと、それは加害と被害の戦争の真実を伝え遺すことです。しかし戦場体験を語ってきた老兵士は、消え去りつつあります。貴重な体験を受け継ぎ、風化させないことが求められています。